

岡崎嘉平太記念館

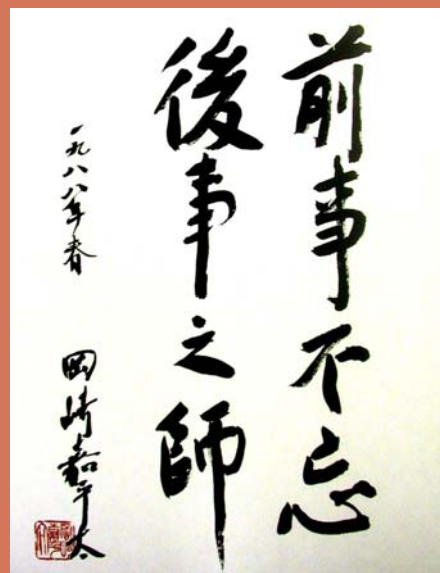
だより



Vol. 4

2005.12

岡崎嘉平太氏遺墨



前事不忘 後事之師

岡崎嘉平太氏の一周忌にあたり、岡崎氏の遺墨をもとにご遺族が作製された色紙です。

色紙には次のような添え書きがありました。

岡崎嘉平太記念館にて頒布

：思い起こせば長年の悲願であった日中国交回復が成った一九七二年九月、その記念式典に招待された故人(岡崎嘉平太)は、人民大会堂での記念スピーチの最後にポーヴォオールのことを引用して、次のように結んでおります。

ポーヴォオールが戦後訪中した際、南京で日本人の旅行団を見て、通訳の学生に感想を求めると、「我々は忘れることを学ばなければなりません」という返事が返ってきたそうです。彼女は、自分たちフランス人が戦後パリにドイツ人がやって来たときの態度を思い起こし、そのことばに深く感銘を受けたと記しています。

覚書貿易の交渉で一九六二年の十月に周総理にお会いした際、周総理は「甲午戦争(日清戦争)以来、日本はわが国を侵略してきた。特に東北(満州) 事変以来は、わが国の奥地深くまで侵略して、人命、財産に多大な損害を与えた。われわれはこれを深い恨みに思っている。しかしこの恨みの八十年も、日中友好二千年に比べればわずかな時間だ、だからわれわれはいまこの恨みを忘れるように努力している。恨みを忘れて、これからは日本と手を握って、アジアを強くしようじゃないか。その強くした力で、アジアの外に向かって、侵略するんじゃない。将来もし再びアジアの外からアジアを侵す者がおったら、協力してこれを払い除けようじゃないですか」と述べられました。わたしたちは、忘れる努力をしている中国に対し、忘れない努力をしていかなければなりません。そして恨みを忘れてもらえるよう努力しなければなりません。忘れる努力と忘れない努力が実を結ぶとき、新しい日中、そしてアジアの時代が拓けてきます。

その後、事態がこの通りには進展しなかったことは、皆様よくご存知の通りですが、そのことが常に気がかりであったらしく、折にふれ、また度々の訪中旅行の各地でのスピーチにおいても、戦争責任の問題を言い続けておりました。一周忌にちなみ、この「前事不忘 後事之師」を、生前ご親交を賜わった皆様に故人を偲ぶよすがとしていただければ幸甚に存じます。

平成二年十一月

岡崎 時子

「岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える会 第四回講演会」

平成17年10月29日(土)開催

たかむき いわお

- 講師 **高向 巖** 氏 (元日中覚書貿易事務所北京駐在員、現北洋銀行頭取)
演題 「中国と私」

まつはたきいち

- 講師 **松畑熙一** 氏 (元岡山大学副学長、現中国学園大学・中国短期大学副学長)
演題 「地域からの平和発信」

高向氏は、岡崎氏から「現地を旅して現地の人とよく付き合い、特に歴史をよく学べ」と教えられたことや、日中覚書貿易は、政府間が困難な状態でも別のルートで繋がりを維持するための外交の知恵と話されました。また、米国留学後、IMF(国際通貨基金)におられた経験から日中関係を考える時は、特に米中並びに日米関係をみると様々なことが理解できると話されました。



高向氏



松畑氏

松畑氏は、平和に繋がる行動として、自然と人間の共生を大切にし、育み、守っていく役割を地域が担うこと、また私達一人一人が自然との和、人との和、先祖や歴史との和、この三つの和を日常的に大切にしていくことが重要で、一人が変われば世界が変わると話されました。

この講演会は、当記念館が岡崎氏の生誕の地 吉備中央町に開館して以来、毎年秋に当地で開催しています。

講演会に参加して

私は、岡崎嘉平太先生の細やかな心配りや、国籍の区別なく若者の成長を喜び、また導く姿勢に非常にあこがれています。

さて、今回の講演会の高向様がお話しされた中に、改めてハッと気付かされたことがあります。それは、日本が世界大戦に敗れたとき、中国は日本に対して賠償金を求めなかったことです。その理由は中国側の誠意ある見解によるもので「戦争は一部の日本人が起こしたもので、多くの日本人はむしろ戦争の犠牲者である」との考え方です。このような寛大な対応ができたのは周恩来総理がいらっしゃったからだそうです。しかし、日本の代表者が靖国神社に参拝することは、その賠償金を求めないとした中国側の誠意ある見解を否定することになるというお話でした。今から約60年前の出来事が、深刻な現在の両国の関係に繋がるとは全く気付いていませんでした。

それから、松畑様からは「歴史年号を覚えることは学習とは言えません。正しく理解することが学習するということです」というお話をいただきましたが、全くそのとおりであります。私自身、過去にあった出来事を認識し、行動することが世界平和への道であると確信しました。

これからも多くの若い人達にこのような講演を聞く機会を設けていただくよう、さらなる記念館のご活躍に期待したいと思います。

(吉備中央町 大木 一恵)



■ 岡崎嘉平太記念館平成17年度企画展

「岡崎嘉平太訪中100回の足跡 -国交正常化後の交流を中心に-」

平成17年9月22日(木) ▶ 11月30日(水)開催

■ 王毅駐日中華人民共和国大使が来館されました



王毅中華人民共和国大使

企画展最終日の11月30日(水)には、王毅駐日中国大使が来館され、周恩来総理など中国要人と岡崎氏との交流を紹介した展示や、若い頃の胡錦濤国家主席の写真など様々な展示品の前で立ち止まられ、熱心にご覧になりました。

また、山元峯生全日本空輸(株)代表取締役社長や、男子9人制バレーボール国体選手など多くの来館者がありました。

■ 展示の一部を紹介します

このたびの企画展では、国交正常化以降、岡崎氏が日中間の友好をさらに深めるべく、経済・文化交流や友好事業など様々な交流の発展に活躍の場を広げ、尽力した足跡を写真や記念品など約90点を展示し、紹介しました。

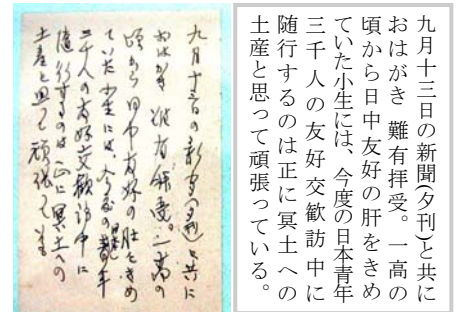


日中覚書貿易閉幕式・パーティにて
右から廖承志氏・劉希文氏・岡崎氏

■ 日中青年友好交流三千人訪中団

昭和59年(1984)に日中両国で、経済・青年交流を目的として「日中友好二十一世紀委員会」が設けられました。そして、北京・上海などの六都市で「日中青年友好交流」が行われ、中国の招待で日本側から約三千人が訪中し、岡崎氏も“最長老”として同行しました。

岡崎氏は日中間の人と人との交流、特に若い人の交流に尽くしました。



友人の杉山久男氏に宛てた葉書

■ 第100回目の訪中



鄧穎超周恩来夫人と
(平成元年5月20日)

平成元年(1989)5月の訪中が岡崎氏にとって、戦後100回目の訪中となりました。北京の滞在は、ちょうど天安門事件で戒厳令が出された20日と重なりましたが、岡崎氏らを乗せたバスに出迎の中国人が機転を利かせて「周恩来総理の老朋 岡崎嘉平太先生」という紙を貼ると、道に溢れていた群衆が拍手で道をあけてくれたという逸話もあります。この訪中には、戦後すぐ岡崎氏が社長として再建した池貝鉄鋼の元社員を中心に約40名が同行しました。また、郷里の人や華興会(戦前上海の華興商業銀行で一緒に働いた人を中心にした会)、覚友会(日中覚書貿易事務所元職員を中心にした会)など旧知の人々と一緒に行きました。

こどものひろば



おかざきかへいた

岡崎嘉平太さんものしりトピックス



ゆうしょう
優勝 カップを手にした
34歳のかへいたさん

かへいた しょうがっこう ねんせい とき はじ
嘉平太さんは小学校5年生の時にテニスを始めています。
ほうかご こうてい どびん みず せん ひ れんしゅう
放課後の校庭に土瓶にくんだ水でコートの線を引き、練習を
したそうです。にほんぎんこう にゆうしゃ さいしよ かいがいきんむ
日本銀行に入社して最初の海外勤務はドイツ
してん じょうし じん こうさい
支店になりました。そのとき上司から「ドイツ人とよく交際
ものごと みかた かんが かた りかい
して、物事の見方や考え方を理解できるようにしなさい。」と

おし つう ひと
教えられ、テニスを通じてもドイツの人とつきあえたことが、
さまざま やく まち す
様々なときに役だったそうです。ベルリンという町に住んで
にほんじん たいかい ゆうしゅう
いる日本人のテニス大会で優勝したこともあるそうです。



きねんかん しごと 記念館の仕事



だいくどうぐ なに つか おも
かなづち、メジャー、くぎ・・・大工道具ですね。何に使うと思ひ
おかざきかへいたきねんかん がくげいいん てんじどうぐ
ますか。岡崎嘉平太記念館の学芸員の展示道具です。

がくげいいん あき きかくてん じゅんび さいしゅうだんかい み
学芸員は、秋の企画展などの準備の最終段階として「見やすく、
うつく あんぜん ところ いっしょうけんめい てんじ
美しく、安全に」を心がけ、一生懸命に展示をしています。
てんじ み たの
どのように展示しているかを見てみるのも楽しいですよ。



編集・発行：岡崎嘉平太記念館

〒716-1241 加賀郡吉備中央町吉川4860-6きびプラザ内

TEL 0866-56-9033 FAX 0866-56-9066

ホームページ <http://www.kibicity.ne.jp/users/okazaki/>

Eメール okmh@kibicity.ne.jp